

【翻刻】『名園記』(『視聴草』続七集之九所収)

① 郡山侯山林 庚午(文化七年)重九前一日 白藤君漫抄 癸巳(天保四年) 甲午(同五年)上

二十三

六義園 悦峯筆 入口の額也

【中略】

右其大躰なり 水藩立原甚太郎 同藩四人

安藤藩鍋田舎人 黒川藩鳥羽桐塙と同く遊ふ 桐塙東

道たり、近日楓葉染霜の時中根(野か)石翁を迎ふるか為に

園中日々人をやとひ掃洒せしむ、百五十人つゝ也、多き時八三百人

余と云相伝ふ石翁を迎ふる諸侯八金を費す事千金二

及ふと云、近頃去諸侯中根氏を迎ふるに、ギヤマン

の宝箱の如きものゝ中に小粒判を盛て引肴とすと云、

他是を以て推へし、故に役人日々来て園中を検閲す、

吾輩其役人の帰るを待て園に入を以、見舞て莊門を

出れ八日沈西山、立原氏兼而約せし染井の御葉園に行

へしとて行、園門外に渋江長伯御預りの大木標あり、園に

入綿羊百疋斗も蓄置、五六疋圈を分ち日々出て遊

行する所あり、竹垣を以て隔、殆廿所、芝を種たり、広サ

百畝斗、御預の人云、冬に至り、綿羊をとらへ四足を縛し、

はさみを以て毛を剪ゴロフクレン又羅紗を織る、此綿

羊三十程の毛を以て纈に絹壺疋を織と云、夏生れし

子ハ多く死す、冬生れし子育す然共冬を恐るゝ事甚し、

多く冬厳寒に死す、我輩行て臨めハ恐るゝ事甚敷 皆

一所にかたまる、かの欄中に追出すに人の往来を恐れにけ

廻る中に、屢蹉跌して倒る、大きさ大犬に及ぶ、せい高し、

角有もあり無もあり、一様ならず、火事の時に入置の備

あり、垣につゞき南方に作る圈ハ屋ありて火に及ぶを以

其地に置也、夜暮草に露多し、古の染井宛然今あり、

一池の水是より生すと云、諸葉草を多く見たれとも昏黒

難弁、デモと云木あり、長伯蝦夷より取来る、綿を生す

といへども土地異なる故か其事を見すと云、東道の「氏ハ

立原氏の門弟と云、園中諸葉を精くみるあたハす、遺

恨といひつへし、園門を出れハ五時に近し、茶の枝を多く折

て諸子二分つ、巢鴨通りに出、水藩諸子と手を分つ、飢

難忍田舎の菽店(＝蕎麦屋)二入て食す、餽糲頗可厭、然共飢ヲ以て珍膳嘉肴の如し、二椀を食し三椀を喫すれハ飢少く療るを以て其粗を覺ふ

郡山園中の山ハ本郷大根島より土を穿取て作れりといふ、且大石皆筋違橋より運搬す、高きハ八九尺にも及ハん、其費ミナ諸藩より出つと云、当時侯の気焰赫奕たる事概して知るへし、按するに石標の名を命する国学

家より出ると儒生とに出るとあり、当時徂徠 季吟輩の名付しならん、昔この藩所蔵の兼当和歌集といへるを

閱せし事あり、春秋花月の宴の時季吟 徂徠 知慎(＝細井広沢)等の詠せし哥あり、文会雜記に徂徠の哥ハ壹首ならてハなどのせしか、此書をミレハ二三十首を記せり、故に此標も

当時命せし可知、此頃新に添たる標及八景の石碑一箇皆関克明か書する所也、恭(＝白藤)嘗ておもふ、頼霞厓(頼春水か)日本人景を設るに八景に過る事不能、帰帆秋月実に和

習極れり、人をして嘔咽を生せしむといひし事思ひ出す、恭おもふに七景とか九景とか又十景とかなして落雁夜雨を尽く除たらハ雅潔ならん、八つにかきるは俗気甚しかるへし、此碑を見て霞厓か言想像し後二

書す 九日

## ② 姫路侯浜町の別荘 癸酉(文化十年)隨筆

癸酉四月五日 姫路侯浜町の別荘に遊ぶ、精里の

誘によれり、野村大陵 鈴木幽谷 山内穆亭と共ニす

柳亭といふ亭に上る、洗塵亭ともいふ、業平の井あり、

元相良相公の苑也、相良の時井幹(＝井桁)をうつし玉ハれと請れしに写せしをとめて真物を送れりといふ、隠れ蓑と

名付し名石 利久の所持の石あり、中凹也、土蔵の傍に

あり 園中広サ七千坪といふ 元よりの園七千余合せて

一万五千計もあらんと 稲荷(右辺に「トウカ」堀 今俗にとうかんほりといふ

## ③ 白川侯大塚別業 金令子 遺閑紀聞 文化十二年

四月四日 精里の誘ニ而大塚白河の別庄に遊ぶ、此荘ハもと

室賀氏の荘也しを白河の室賀の屋敷と換たる也、

六七千坪も有なん、精里ハ候の師なれハ論なし、其外は  
相見以上の人ハ取扱六ヶ敷事也しか、精里親類ニてと  
云事ニて取扱手軽くせし故、我行事を得たり、それすら  
広瀬大八出来りて予に云ハ、今日ハ野遊の路より来らせ  
給ふつもりニて来るといふ事ニ取扱可申候由を申、田内  
主税といふ人肩衣ニて出始終相對す、当越州より干  
菓子一重を贈らる、老侯（||定信）より白河製の土瓶至而白  
きすやきなるを内に薬をかけこんろを添 芳茗を  
添たると餅菓子一重すしを唐櫃の形の葎簀  
にて作りたるに入て 哥壺首短冊に書して

山里をとひたまふと聞はへれと青葉のミしけ  
りて何のはへもあらしを藤のはなハかりは今  
に残りぬらんとおもへは 楽翁

ミ山木のはへなき中の藤の花 かゝるをりとや散のころらむ

精里詩なりて書す、其余五六枚を書す、石塚次郎  
左衛門 土屋七郎陪して詩作る、園中藤花盛なり  
孟宗笋数十根大きき如股座中四片の屏風

明人四明ノ李瑩か画ける花木領毛をあらき絹に  
書したり古色筆法妙不可言、一片長サ一間程は、  
二尺もあるへし、是そ家の珍器と見えしに、古法帖  
数幅を出して示さる、蘇の「の法帖をみるに、

精里是そ世に有物とハ殊に勝れたりと褒、跋文  
世間にあるハ糲糊難読、此帖ハ頗鮮明也、此亭の  
傍に（右辺に「坂本也」）亭をかまへ田舎の趣を模せしあり、精里に  
亭号を付玉ハり候へと老侯より命あり由広瀬いふ、  
精里跡より名を命せんとして後に「号す石塚 土  
屋ミナ詩あり、老公の贈り物ハ昼過に来れり、庭に  
数種の椿を種て品を分てり、藤花ハ実に盛也  
銀杏の樹の大なるに花爛漫山蜂数千群をなす、  
四つ時より行て七つ過に家に帰れり、

④ 王園城院 同卷四月の条（文化十二年）

十三日 山王園城院ニ参る、小鍋太夫 村川佐一郎と云人

廿日程以前二江戸ニ出、押付帰郷するを送る也とて

皆々会す、鈴木文左衛門 友野雄助(〓友野霞舟) 行西右近 相原四兵衛  
「」送 英逸庵来会す、探韻詩を作る 柿伝跡より

来れり、主人に陪せし故今日おくれたりと云、精里八村  
川氏と対揪数局、其余柿氏と村川氏と戦ひ又八村

送「」と戦ふ時も傍にありて見たる故詩ならず、諸子  
皆詩作り 西氏八局品下りて予と同じき故二三局

を戦ひたり 相原も同格故是とも对せり、午飯に八窃二  
鰻□(魚偏に麗)の蒲焼を持来りて諸子に食ハしむ 魚臭膳椀

に転したり、傍に坐する小童甚た怪ミたる顔して  
給仕せり、勿論座主ハ外に行て不在、此魚のくしともハ

如何してん 定めし少ハ怒もしけん、しかし内々にて八院主も  
食せし事も有へしと諸子一同に笑を発す、十余年前

碧海 白水 大草 松崎 寧恒 植木 中村杯精里を迎  
て済松寺へ遊ひし時 其時の院主謙堂先院主ハ我祖

父熙光君原配林専太夫人の弟にて大伯父なり、予  
宿にむき身を行厨中ニ入て携しを、小僧見とかめて

大きに憤ミたりし時 間宮君とりあへず  
つらの皮千枚張の厚くともむきミられてハせん方もなし

とて大に笑たりし事想像す、去年の会にハ猪肉を  
持たりしか、けふハ鰻□(魚偏に麗)となれり、満坐皆阿鼻の責

難免とわらふ、床に石摺をかく、西人の打せしもの也、  
竹石の画傍に陳継孺 董汝亭 董其昌 温体仁

△石をハ憑可宝画、竹をハ憑起震画くと書せり

韓敬 張延登等の明人詩或文を書す、屏風大字  
二字つゝ九臯文(〓細井九臯、名は知文)か書也、家有賜書といふ印を推す、庭

中数畝に不過、杜鵑花(〓サツキ)猶のこれり、蓮池庭に接数万  
畝一目にすへし、荷錢纒に水面に浮ふ、湖を隔て

甲邸幾所雄山の鐘声西南に聞ゆ、日已に昏暮  
に帰れり、寺中ハ市城とことにして ことに閑なるを覺

ゆ、此日西氏問ふハ桂里(〓植木玉厓)君近況如何と、予在番なるを  
答ふ、

\*「雄」は市史稿では「雑」

⑤ 島原侯箕田別業 同卷五月の条(文化十二年)

十五日 兼而精翁より誘ありて、三田三丁目嶋原侯松平

主殿頭別荘に参る、朝鈴分君と同く行て業にいたる、

**頭注** 式間半の床に探常(≡狩野探常)の画ける猿猴の月ヲ捉ると鶴千

\*羽程もあらんの大幅、中々唐紙よりも大なる絹也、柱の釘かくし扇の金物、精翁門弟に佐久間喜一郎と云る

人此侯の家来故 来りて始終陪せり、詩を作りて出せり、

予より先に広瀬大八子 柿伝子 土屋七郎 石塚次郎左衛門

杯来り居れり、加藤俊次子跡より来ル、精翁龍土の

伊達遠江守君邸に講してそれより十二三丁もあらんとて

駕を辞して歩し来れり、実ハ其甘町余也し故流汗

衣を浸し淋漓玉をなす 柿子翁と対局す 二つ三つの交也 暑

甚し 園中数千歩景致いふ計なし、巨木衝天其枝

\*葉数十歩を蓋ふ 樹下にて都築 石塚 加藤 土屋と

立話す、事久し、此日暑甚しく且予か熱も不去 鼻涕

咳嗽不止 気力も亦不快、頃大学君より話せられし結城

家古文書の事を広瀬大八に借んと請しに一諾して

許す、此人温厚にして少く洒落を帯、少しも岸崖なし、

其人甚温雅也、人して可借由を約す、柿子練兵実記

楓山倉二有りや一閱すへしと話せらる、此先生武ヲ好ム由

を知る故帯せし兼常の刀をしめす、物打にふくれをおし

たるか破れたる疵横に出たるをミせしに、いや少もくるしからず、

「」か言たる詞に、我輩の劔何ぞ疵の事を論せん それ

迄打合たらハよき一人分の働なるへし 少も不苦 此ミたれ、

孫六流のミたれ也といへり、精翁諸子に向ひていふハ 今日

の侯ハ詩を能作り玉へり、尋常の作にあらず 心得べし

といへる、我輩もとより拙なるが 此事に聳て常に遅

吟なるがいよく意阻て句不成、夫謹て考るに此主

人の先侯ハ三河の名族にして百年徳川氏の羽翼の臣

たり、いつも志を不変せず、既四世死事の家にして其事

史中に顕然たる家也 四死ハ伏見の城、大坂鳶の巢それ

一死報国すら子孫の大に栄とする所なるに 三世迄死

せし事古今いまた其事をきかす、無双の忠節と云つべし、

恭常好んで国初の野史家乗をよむ、かの伏見落

\*

探常ハ探

幽の彦也

真桑瓜の  
香爐 外に  
蔦のはいか  
りたるか高サ  
六寸計 定て  
奇品にぞ  
あらん

\*\*\*

伊達の藩  
士都築訓  
次も来る

城の一条を見るに及んで未曾三河士の志一なると  
国恩の人を感せしむる事の深きを仰歎せずんばあらず、  
尔時天下の人攻城野戦の事計へ、西方万国に勝れり  
ともいへん、節義の二字に於て大概乎耳きかさるか如し、  
実に小利害毛髪の如きに至るべし降恐後、主を殺  
親を追ひ、兄又八舅を殺す事、恰も奴隸を殺すと同、  
独伏見一城の人視死如帰、従容全節、他の諸侯  
の決而無所也、利を以て誘とも不動、害を以て恐れ  
しむれとも少しもおそるゝ色なし、節義忠信全から  
すんば何を以て此にいたらん、此鎌倉室町の業に遠く  
過て治平永久なる所以也、予か拙き詩もせめて此事  
に及んとて国史流伝三世節、君恩堅固数朝侯と作  
れり、言諛言に似たれとも、実に肺肝中より出る也 詩  
成て後鈴分君と対局す、予か拙局とても古柿  
二君に八遙に格を隔たる故対する事あたはず、鈴  
分と八力相敵たる故 戦ふ事四局連戦皆勝、二君  
傍に在て笑て不止、石塚氏画をなす、此園前に  
八海上を一目に望み千帆尽く牆上に浮ぶ 西芙  
蓉を樹間に望む、下瞰八三田の市塵足下にあり、  
都下最第一の園と覚ゆ、海上月の上るを見んとて  
日暮迄ありしが、晚雲陰靄して月不見、黄昏辞  
して帰れり、佐久間云し八法泉寺(右傍「寺町」左傍「二間寺也」)八主人菩提所故

常に行と云 詩ノ聯後改めて 死恰鴻毛三世節、恩分竹帛数朝侯

⑥ 浜町稲荷堀酒井雅楽頭別業 遺閑記聞乙亥(文化十二年)五月条

十九日 又精翁の誘にて浜町稲荷堀酒井雅楽頭君之別

荘にいたる、この老侯にハ杉本忠温宅ニて去」「年正月」「日

相会せし也、其後聖堂参拝有し時も我出迎へし時に詞を

懸られし也、此別墅去十年癸酉四月五日 精里 野村 鈴分

山内杯と行し也、今日山内有事て不行、友野行けり、予は

退衙より八つ時に行、古しハ相良侯の別業故木石力を

尽し且居処も美麗成しか」「の火に灰燼となると語

る 惣坪数一万五千に及ふといふ、元来七千坪なりしを 相良

の地を合せて如此、業平の井幹あり、石にて作れるものにして

磨礪刳徹して丸き様ニミゆ、千年旧物いと貴し、此石を

相良侯より」「の地知せし人に模し可給と求られし時

彼人模せる石をハ彼地に置いて真のものを贈られし由

殺風景といひつし、其余花石夥しく有し由 此地を奪

れし時ミな池にしつめて去りぬ、今其石を出さんにハ許

多の費にあらされハ不能、故に今猶水中に歴々と見

ゆる也、かくれ蓑と題せる石 利久所持の物也、中凹にして大きき二ノ三尺土蔵のかたへらに

あり

陸羽家の喜ふ石也、名石なりと云伝ふ、出迎へし老儒

田中新助名熹 字子和 号「」 高須七郎太夫名裕 字文

緯 号石亭、酉年(文化十年)逢し人也、一人長原淵蔵名「」字「」

と云人 是も先年逢し由面を忘れたり、田中翁ハ三十

年前昌平学舎に入學せし由 先年南隣菊池氏(右傍「彦三郎」)に

来りし事を話す 彦三郎と云ハ当主人より三世の祖父也

柳亭といふ、池に臨たる一亭欄に憑て望めハ地水蒼々

蘆花海辺割葦の声、蒼樹頭に白鷺夥しく

宿す、其下白糞地を塗す、此亭一名洗塵亭と

いふ、諸子池にのそんで釣す 鮒 たぼはぜ、数枚を得

たり、精翁名月庵とかいふより潔白蕎麦を得て

携ふ、其白さ雪の如く細織 羅番(蘿蔔か)に彷彿たり、名

品といふべし、侯より重詰三重を出す、道明寺のあん

ころ一重 かしハもちの如く葉なき物黄白成一重 にしめ一重也、

其余何某よりとてすし一盤 鯛の煎たるとさし身

一盤と吸物を出す、先に八少し飢たるを覚えしか、今日ハ飽に過たるを覺ふ 先二蟹を得たるを思ひ 蟹を得てノ持帰らんと

糸を以てはさミをつなき置たるに、はさミをきりてにけさる、ノ其勇可称もの也、毒蛇若蝥手、壮士解腕の情想像す 岸辺を

探りしかとも、かれ走り隠事迅速にて一をもえず、談

笑数刻にして帰る、今日ハ広瀬大八 石塚次郎左衛門も往

り、都築 加藤約せしかとも不來 広瀬にハ此間托せ

られし大草の詞又老侯の書の事杯頼む、精里早く

帰れり、諸子と同く帰る、園中を出る迄長原氏燈を

して送る、田中 高須にハ亭中ニて辞す、園尽て馬場ニ

至らんとする所にて長原氏と別れぬ、杖つき一人軽さん

はきたるか如例出来て門迄送りぬ、門番も椽に下り

座して拝す、それより鎌倉河岸に至るに兩大二降りて

一麵亭に入りて麵を食して雨の晴しをまつに 忽ち

晴たり、亭を出て歩するに、細川邸前又護持院 三

番原辺潦所々にありて殆んど雪駄を汚さんとす

幸に河岸にてふらてうちん一つを買得て点し来る故

憂なし、二番一番の原を過て雉子橋に至る時ハ橋

上の板のミ少しき湿て地上ハ雨有とも不見、牛淵に

至れハ塵土人の裙に傍ふ灰燼中を行か如し、然れハ神

田橋外の雨とミゆ 家に帰て問ふに一点の雨なしと云、千里

不同風 百里不同雨(正しくは「百里不同俗」といふよりも甚し 清川太平次又

彦か事を問へは、三四年以前に亡命し何方へ行しやらん

不存と高須子答へたり、

⑦ 芝新銭坐会津中屋敷 同上六月条(文化十二年)

六月四日 又精里の誘ニ而芝新銭坐会津藩の中屋鋪

ニ遊 此屋敷我親族岩田氏 祖母真月ノ夫人家 氏家氏(右傍に「五郎太夫」) 伯母(右肩に「代助」)教

寿夫人の出大畠氏(右下に「光運夫人」)の嫁する家也 訪ひし事ありしか 久々

ニて去「年」「月」「日」精翁 柴野久四郎と遊ひし事あり、

児嶋宗悦と云医の家に往、主人ひそかに園中を誘ひ 竹田

俊蔵といへる文学出て相見せし、今日ハ渋谷春庵の家に

往、春庵の子新五 元名ノ進 精里塾中の人故、是か先達ニ而

遊ぶ、今日ハ役人ニ達せし故亭院を開き無残所見る

事を得たり、閣あり朝陽閣と題、穆如清風の関防尚

実之章と香山の落印あり、うらに朝陽閣三字九条従一

位左大臣藤原尚実公染翰也、明和己酉(乙酉)明和二年(か)五月とある亭記

朝鮮人南秋月(朝鮮使節製造官の南玉)か文あり 十二景の事を称す 文別ニ写す 十

二景八

双蓮池 竹裡径 醉月岡 春樹堤 白泉橋

偃松嶼 聞潮亭 映雪館 秋香園 涼風舎

匹練瀑 夕照林

盆水二あり、一ハマ水二而中に嶋あり 瓢の形す 荷燕子

蓴菜(ジュンサイ)などあり、潮水の入りし故にや少しく憔悴す、一つハ

潮水を引る也、二町四方もあらん海水の入口を三重に柵

を用ひて魚の出さる様に構へたり、二柵ハ竹一ハ銅

細を用ひたれハ魚の出へきやうそなき、朝早く蓴食

して穆亭と共に友野氏 野村氏を誘ひて行 鈴木氏

いつも早き人なる、此日ハいか、有けん遅く来れり、引つゝき

土屋七郎 是ハ今日の事管せり 大塚村石塚次郎左衛門 藩の

人」 「牧原只次郎(ハ半陶) 昌平諸生ノ寮ニ居る人 出て相對す、朝陽閣ハ座鋪の北

にあり、東面す、高く地をきつき亭を構ふ、地の高サ七八

尺計、座鋪ハ東南に向ひ西ニ馬場あり、三丁余もあらん、十七

疊の上座 廿疊計の次の間二つ、遠沢といふ会津の画家

七十五歳の落款せし屏風あり 柱の釘かくしに銀の四分

一鶴を打、亭ハ丸木作り、天上は丸木の面取たるとときん形し

たる木を打て亭の柱も丸木なり、座鋪ハつがの木の柱(右傍「糸まきの密なる」を

用ゆ、小用所処々にあれとも皆封して人を不入、是侯の用所

なれハ也、傍なる用所に候(ハ松平容衆 一八〇三年生)の草履と覺しき小サき履あり、

侯年ノ十三四 外に映雪館ハ富士を望、聞潮亭ハ品海眼下に

見ゆる、匹練瀑ハ跡のミありて水ハかれたり、池ハ常にハ釣

する事を不許共、今日ハ格別の事也とて釣具二つを出し

鈴木氏 石塚氏 山内氏 友野氏杯行て釣ル 鮎の大キサ五六

寸計なる甘尾計 九寸一尺余なる二十尾計を得たり、蝦すがの

子杯目もかけず、鮎の尺余なるハ釣綸を切て逃去ル事幾

度といふことをしらす、舟一艘を浮へて釣ル、初つりし時

午時に十余尾を得たり、其興無限、頗ル飢を覺ふハ朝

早く食せし故也、飯を喫して後釣するに不得魚、七つ時

ニや及ハん頃に又甘尾余を得たり、澁刺として竿に上る

金鱗巨大眼を驚す、凡此池釣せざる事十年に及ぶ、今の侯の幼にしておへせし故遊獵の事なき故也、故二池中皆魚肥て且数万尾有とミゆ、其余小魚ハ殆百尾ニ及ハん、

いかに侯何任(ハ任公子)公の徒をしてつらしむとも、かく獲物ハあらし、況や尋常の人をや、魚余りに多して鈴分、石塚の二君ハ詩を不作、鈴分少し水を試ミ遊泳せり、覆没沈浮

平生の技を逞ふす、久く廃せし業故ニや疲たる事甚し、

新吾 鈴分杯対局す、予敗する事甚し 十二景を分ちて五律壺首つゝ作らんとて題を分つ、春庵 精里の書

を請へり、扇杯六七枚を出す、此四五日炎熱如焚なりしも、

今日ハ幸ひ涼風入袖、午前ハ天陰りて日を不見、加之

大廈の中に坐せし故些の暑氣をも不覺、七つ過より鬱

蒸を覺ゆ、諸君詩なれり、凡今日の樂ハ近来如此の事

を不覺、景色一也、釣魚を得る事多し二也、涼風三也 況

や一堂の中歛娛して不知終日、按に此祖侯土津靈

神ハ閻齋ニ学ひ、神学を吉川惟足より許可せらる、ひもろき(ハ神籬)

岩坂(ハ磐堺)の伝ハ閻齋侯より譲り受たりと新芹面命に見

ゆ、当時賢君にて在し故、談海ニもかの三賢人七君子の

中にものれり 新太郎少将 水戸ノ西山公 此侯 故に十二景に名づくるも不俗 かの

好学の余沢推て可知、日暮諸子と帰れり、鮒壺尾つゝ我

同道人ニ贈らる、わかちて家に帰る、午前精里来ル 神戸ノ侯邸

に至りし故来る事おそし、誰人か出せしにや大重箱に饅頭い

まさか一重を贈る、午時飯を出す、汁ひら」」の切身煎

たる也、其後渋谷氏干菓子一重と上あんの餅菓子一

重を贈る すし一盆もあり、釣得し鮒きうりと同く繪に

なして出す、「」しいまゝくらひし故腹果然(ハ満腹)たるに河漏麴

を出して晩食ニ充つ、飽満にたへす、すゝりふた七種酒壺瓶

を出せとも酒人少き故酔人もなし、山内少し飲たりしか、対

飲する人もなき故纒にしてやむ、恨る所ハ蓮池舟を浮

へて盪棹の翠鬢なし、座上新様の歌を唱へ欄前

憑干の紅粉を不見、蘭麝薰人の少好を欠く、是

欠典也 しかし座上の諸賓皆方正嚴毅の人のミにして

誤て行酒了鬢の標致なる爰に出ハ夾谷の会に夫人

を退け又ハ山鳥不知紅粉樂の如く、又ハ文祝唐の船

中の如くならんハ興も又尽へし、予ひとり穆亭と此事を

ひそかに語して嘆息する而已、分つ処の鮒家に帰りて煎で

食す 味又可賞 満腹累々として卵子夥し 恨らく八秋末  
冬初に釣り得てこれを食せざる事を、

⑧ 業平橋畔西尾殿別業 同卷六月の条(文化十二年)

十三日 精里催二而本所業平橋畔横須賀侯 西尾隠岐守(西尾忠善)  
別荘へ行、幽谷公事二而不往、穆亭風を病て不行、蓐食  
して崑崗 大陵と同じく行、浅草より巴屋といふ茶店二  
命して昼と晩の食を買ふ、亭の座鋪拾畳敷式々

間さまでの事とも不覚、東に向て式間程のあゆみの橋  
をわたり行て一亭に出つ、十五畳の間侯の居間なり、

唐紙(右傍「カラカミ」)まへら戸(舞良戸)画皆玄丘藤好徳 玄対門人/也と云 か画きし  
鯉三疋 小唐/かミ 竹籠に黄蜀葵 牡丹 断腸花(秋海棠) 藤 蘭 枸  
杞実など入たるを二つ画けり まいら/戸也 鴨雁をも画く 大から紙

釘かくし銀四分一 蔦桐楓 松の翠 銀杏杯尽(右傍「コトく」)く別物也、  
鴨の引手ハ大キサ大鏝程の金めつき九龍奇工也 まいら

戸引手【図】 赤銅にて……の処上り下り龍を金めつき是  
亦可見、此座鋪に至て所謂塞至り(底至り)を覚ふ、障子大骨皆  
あめ色檜とミゆ床に刀かけあり【図】といふ形五冊物の

絵の如し、二階上り口鳶上り梅色のさらさの幔あり、上り  
段壱間のはゞにて初北に向て上り東に折て南に出る 釘かくし  
金めつき櫛松 侯の定/紋なり 園中を一望す、天井五嶽真形の形  
の浅黄のはり付欄干けやき図の如し、監園吏平岡

長作者出て相對す、南方の浮屠高く見ゆるハ靈山

法恩の二寺也、予吉川の居を問 東南に見えし松の木即是也  
と教ゆ、坪数式万あり、橋九つ亭六つ有と云 園中を  
歩して見るに左まで工をも試さず、殆ど田舎の景を

覚ふ、況や隴畝数千畝 農夫婦耨耕の有様実に

野外の趣の如し、大陵の詩に 深園野趣即天工と作ら  
れしハ今日の実景と覚ゆ、園路徑を屈曲して殆ど

迷ふべし、今日ハ翁病て不行、小太郎か石塚と 伊与人 といふ  
書生を引いて行藩より去年の冬精里に入塾せし土

屋慎三といへるか東道の主人たり、崑崗 小太郎ハ釣に

耽りて坐にあらず、大陵と相對して詩を吟詠す、二階

を開きて風を通す、涼風秋の如し、我僕と大陵の僕

と頗二炎天に舟を盪す、漸飢を覚ふ、予団飯を齎

せし故是にて纔に飢に充、午時飯来る、精翁より托せられ金式分を巴屋にあたへし也、尺余の大鉢二七八寸の鯛塩焼 大あぢねぎの手巻束に切たるむま煎あり、硯蓋様の鶏卵 大切こふの酒煎杯五種の物中とんぶり 赤るひ 新いも入 香の物き瓜 大根味噌漬 茄子新漬を入 大茶碗盛石なき…杯入たる薄葛を出す、酒纔二合計 有とも飲人なし、飯終りて小太郎頻二釣に耽りて園中 歩して伺ふに人工を用ひす、大に人意に可なる処多し、夜 食来る き瓜塩おしに味醂酒かけし干鯉をおほひ、焼 るるひと自然生 大椎茸 切たる豆ふ、焼たる十六さげ を煎て大鉢に堆く盛て焼たる団飯を切ため は／＼五寸 計広／七寸計 に入て持来ル、小太郎うなき一尾と 一尺二／三寸 鮒一尾 五寸／計 を釣得、誇て不止、其余諸子三四寸の鮒三四十尾を得たり、是を先日会津の邸に比するに 今日の大魚、会津の小なるにへるかおとりてミゆ、晩飯後石塚と 小太郎小の酒を喫す、小太郎少く酔を覚ゆ、蚊の 出る事甚し 衣二重を透して膚を噛事雖二て 刺か如し 痛忍ふへからず、莊を出る時日已に暮、小 太郎足の遅き事甚し、酔を帯る故やらん 園中六景 あり、土屋慎三示して云 浮床 水中に一間幅八橋如きもの／を三四間作れり 春浪 店 茶室／なり 招圃軒 一室／也 風雲庵 露台の上／板計を立 小蓬壺 池を南／見亭池 へ作り／かけたり 橋東園 都而坐敷向を／名付しよし 楼のうしろ茶室あり、玄対か 画し三幅対の小幅をかく、夜二入熱を添陰りて月を 見す、篁園云、山内少シの病を八忍ひて来らハ可好二遺 恨也としハく語す、予答 彼紈袴氣習二て病をハ甚しく 恐る、故少しの事を大イに憚る僻有、予其氣力をミるに 先日予か嶋原園に遊ひし時嗽咳熱氣甚しきにひすれ ハ何音徑庭ならん 然を召恒の招にも行べしと備して 忽にやミぬ、富貴に生長せし人大率如此と笑て止む、

### ⑨ 桃園

夢蕉 文化十四年丁丑

桃園 常田寺の桜をみて帰り二遊ひたる

二月の条

おもむき也 初を略して桃園計ヲ取

廿二日 首／略 又西に向て行、淀橋の前一町計右ハ菅廟左の方の茶店に処女壺人年十四五計姿色絶倫なるかたてり、諸子

皆賞嘆す、此婦ハ近隣有名の人なる由、桃園二行 残桃少  
しく花あり、園丁に懇請して御座台の傍に設席、山内  
腰間より一瓢を出してすゝむ、興致甚適せり、予か旧年  
の詩に松偃恰疑朝 御座桃残尚似憶 君恩、といひ  
しを想出して詩あり 数対遺芳、御座頭、戴花

明主好風流、村翁説道當時事、遊獵回頭八十秋 植木  
忽吟して云 憶昔紅霞照眼明、遺芳猶自引都人、唐家  
芍藥隋家柳、不比桃園數樹春、謹按 有徳廟尔時

都下の風頽惰して恰もなま公家の如く士人の年若きハ  
粉白不已 年輩の心も艶なる事而已を専とし、縦令ハ井  
伊氏のおさへに向て傍人の是ハ何くの殿なるそと問へは  
江州彦根の侍従と答ふ、今の井伊掃部頭といふにハ異  
也けるとかや、紀に在し時此事を深く憂させ玉ひて、入継  
より以後専ら武断を事とし毅然たる丈夫の風にして近  
侍の臣蓬頭短髪短後の衣双刀長きを帯ひて其頃ハ

人の野様也と笑ひし程の事なれども、時を救ふの権不得不如  
此、然して後士人ミな武威儼然として干城の任不曠  
といふべし、其傍に飛鳥隅田に桜を植 此二桃を植給ふ  
有文事者有武備 右文武の徳といひつべし、其一代の  
盛徳ハ史官備焉 不俟吾腐言、実には中興の明主光

武昭烈(光武帝・昭烈帝ハ劉備)の上に出へし、且也吾楓山書庫凶書集成を始  
とし數百部の書皆其御時に収蔵あり 紀藩の督主に  
あらずんばいかてか斯の如き事を得ん、園中に坐する事  
久し、日も漸く「」に及んとす、主人ニ謝して帰路淀橋畔  
の茶店に坐して飯を食す、硬飯不可下咽、菜亦賤品  
にして不可、たゞ経机の床に安せし、古色可愛を覚ゆ  
山内是を購ハんとて計りしか、久しく伝へたる者にして度々  
の火を免れしもの也とて不肯、下略

⑩ 松岡侯の別業 夢蕉八卷 壬午(文政五年)十一月

廿三日 約して中山備前守 松岡侯 の業に遊ぶ、亀里権左衛門  
名章 字子含 侯の師たるに依て此人をして園をからしむ、  
園丁を加藤忠蔵といふ、これまた亀里か徒弟也、亀里氏(右辺に「左五郎」)  
旧年同じく岩月氏に槍を学ぶ、尔時少年なりしか、今已に  
四十三といふ、野村君玉 友野 勝田 芝田 山内 鈴分 豚兎(ハ桃野) 内山

氏輩会す 嶋」 「名昶字伯和 号松塙、野村の門也、川上金

吾助 名充成 字子績、号麟巷、同上内山氏謙太郎、名謙

字徳杓 号一谷、小太郎子 植木 入江二君午後出来ル、亀

里子門下朝比奈昌之助 名は一知、字伯行、号瞰江 小日向ノの人 篠原

力四郎(右辺「御徒目付ノ子」)名苞文 字士学 亀里氏の弟也、押田新蔵 御持ノ与力

名教民

字孟孝、加藤定之助 名忠徳 字「」也 阿部良之助 金田権

右衛門皆同く槍法の同門也、誘ひしか事ありて不来 可恨、主

侯朝より放鷹のために来りあり、積景台より遙に

下瞰る所、茅屋四五間、放鷹の故に、高談劇笑を禁

す、暫くして侯より用人をして可来由を命せられ、其

所に至る、ヲシ鴨四枚 青首の雌一枚を得て竹に縛し置

り、暁方と日暮と鳥を得る時也といふ、侯其辺を逍遙し、

実ハ鳥を獲たるを我輩に見せしめんとせしか、折節に

不能得、園中十五景を分ち韻を分ちて詩作らしむ、

本日ハ懽樂園小集の詩を命せらる、侯も七絶を以て諸

士を勞せらる、詩稍可視 紈袴(がんに 貴族の子弟)の人文筆に志ある 大ニ

可賞 魚と果と以て諸子に給へる、皆相約して行厨を

携ふ、勝田と入江と少しの酒を携へて来り飲む、懽樂園

ハ馬場の傍にして鷹場をさること遠し、故に放酒せり、

本日生面の人多く、且加藤氏傍にありて周旋せし故

常日の如く調謔の語ある事不能、一座肅然たり、詩

成る廿余編、亀里氏予二詩を贈 少年の時を述ぶ、侯

の詩を和するもの植木氏 入江氏及予也、園高田馬場東

頭より屈曲して東北二行事僅に三四丁也、園の広さ

一万五千畝也と云、軒上の間七畳 下の間三四畳 三面

障子を開きし故稍寒きを覚ふ、天晴て残楓枯蘆

尚可観、堀ぬきの井あり、嗽玉井といふ、亭 皆梅を植、

三四拾種是梅花字也、演武の場近くに門あり掄材

門といふ、其所より入りて桜の門といふ所より帰り去 朝

四つ時に会して日暮六つ過に帰る、終日逍遙して大に楽

む 余詩早く成事常日に不同、故に諸子苦吟の際所々

逍遙して意大ニ暢ふ、主侯より懇ニ命あり、先に

鷹にのミ意ありて、諸子に挨拶せさりしを謝せらる、侯

容兒先侯に彷彿たり、只身材短小なるのミ、肥肉恰

似たり

⑪ 中山侯別業

夢蕉 癸未(文政六年)四月の条

廿五日早天家を出て高橋氏(〓景保)に至る 主人所蔵の蘭服を借りて明日中山侯別荘に至る 座中の観に供する也

廿六日午前觀巢(〓高橋景保)を辞し蘭服をたつさへ歸る、鈴分氏(〓鈴木分左衛門)に会す已に侯の使路にあへり、植木 山田 柴田 川上 内山

友野 熊坂来り在 豚児(〓桃野)と共に、樫田神明横丁より左転して荘に出ツ、前日亀里氏より書あり、主人明服を着

て相對する由、荘に入て亀里氏の弟「出迎ふ、入江

野村氏先二あり、朝比奈 押田等相對ス、篠崎氏出、屋代

太郎 西井孫太夫 横田岱翁子孫三人 勝田半斎等陸

続して来ル、席上卅余人、大卓に醋一 筥一 鯉羅浮一

今坂(〓今坂餅)一盆に盛て酒あり、しつほくの設せんと思ひすか

と別荘具に乏くして其事不能と察せらる、鈴分

蘭服して主人と松濤館に出迎ふ、主侯もミ(〓紅)の絹

明服、従者浅黄木綿の服 亀里も陪せり、ミな冠を

つく 衆人に謁して後服を改て相對す、舜水の持来

れる服の由、其様を摸せしかとも絹ハ日本二なき地合故

似たるを以て製せり、其古きハ甚損して難用と説

かる、其人伶俐 遇する甚厚し、邸主に侍して常に相

話する故大藩の家老の如し、世の小諸侯扶余の三子の

如くなるに似す、且 幕中にて衆官と常に周旋せし故

大二世事二熟せり、去年いまた行さる寒声岸の西

辺に行ミる 地広して別に乾坤をひらくに似たり、

姿見橋近くニミゆ、或ハ庭を歩し席につき随意

にして歛甚し、植木酔濁を解んと松濤軒に入て

茶を請ふ、一の円頂(〓坊主)座して陸羽の儀をなす、余と

窃に此技をそしり座、忽侯帰り来りて衣を改むるに

逢て席にかへりさる、太郎哥数首をよむ、岱翁

哥壹首あり、諸君詩あり 主人より全幅の唐紙を出し

寄合書をせしむ、勝田氏草書をなす、内山氏と豚児と

隸を書す、主人の画を出し示す、稍可看、主侯肥肉大二

先侯に彷彿たり、聲ハ先侯の大なるニ似す、先侯ハ先水

藩の弟にして今の水藩の「也、侯の詩二曰 丹信情

偶着明時服、徘徊隔市城、空庭常不掃、小墅此相邀、  
人向林間嘯、鵲穿雲表鳴、朝陽如有意、応為徳星生、  
俗翁の哥に 石の火の打出かたきおもひをへいかにしてか、  
君にミスへき 太郎か哥に 十余り五つの景色備れる園  
のうちにて千代も経ぬへし、太郎か哥ハ俳諧躰か古風  
か人の評をまつ、

亀里氏蘭服を借らん事を請ふ、予曰 服の事易々  
只願くハ其持主を秘し玉ハん事をと目録を添へて借  
送る、予詩曰、提携重得訪山泉、処々薫風聴杜鵑、  
衣裳曾見明時服、通達偏疑晋代賢 侯の石を  
画きしに書す四五片 誰以丹青手、描斯黄土精、嶮  
嵩一塊物、応入米家評、席上匆卒衆人稠坐 豪酒  
如涌なるゆる詩を構ふる事不能、孟浪下筆拙悪  
可恥、たゝ一時の責を塞のミ、帰而閲詩 慙汗溢背  
駟馬不能追、追恨而已、五つヲ過て帰りさる、高田東頭ニ  
出て馬場下町を過帰る

⑫ 番場秋山氏別荘 夢蕉甲申(文政七年)五月ノ処

廿六日鈴幽谷東道主人として秋山内記鶴場の別荘に至  
る、阿部氏 山田氏伴ふ、午後勝田氏来ル、監察(目付か)に陪して  
司天局吉田氏ニ至り、事終て高橋氏に午飯し来る也、予  
曾て高橋氏と来れる故に、其門を知、然共尔時事ありて  
莊中遊観する事あたハす、始而其庭中を歩して縦覧  
する事を得たり、午時門前に河漏(≡蕎麦)を食し山勝二君少しく  
酒を用ゆ、本日植木氏有疾、野村君玉(≡篁園)亦有事、約すれ共  
不来、池亭ニ入て座し相談ス、また楼上に來り坐す、本  
日暑いまだ不甚、単物二つを着て座、不寒不暑相よろし、  
途中歩する時ハ稍熱を覺ふ、始昨日道泥濘木屐  
艱于歩 舟を水戸(右辺に「スイド」)橋外に買ふ、舟中咲談可喜、諸子詩  
成、穆亭か詩藍潭をpush五言ノ絶句 予以其韻、阿部氏亦  
歩其韻、諸子ミな詩あり、主人ヲ「」と言、両御番鈴幽  
谷しハく(くに濁点)会す、故に此に借賞する事を得たり、園の広  
ハ漸千畝ニすきすして人工を費す事殆と千金にあら  
されハ不可成と諸子評せり、家不甚広して曲折委曲  
数千席の家に入か如し、手を尽して造り成、入て迷ふかと

うたかへる、或云 此家本家祝融の時ハ主人爰に來りて事を弁し官事を治むと、故に少しく心を用ひて修築せしと先主人の人に語りし也 高橋氏ニきく 実ニ今住所の浜町の屋少しく不用工 尋常の家にして儉素を人に示す、亦■者の用心也、此所は幽僻にして、人來るも稀なる故にかく經營せしなり、其家の所用一柱一梁ミナ凡庸のものニ非ず、ミナ巧を極めて作り出す、且珍奇のもの多く隱所に在て人目に不入をもつて要とす、而心を用ひて見る時ハミナ尋常ならず、量るに四五万戸侯の富にあらざれば不能成、中書組頭の富推て可知也、七つ時辞して帰、園丁不在 婦と処女而已あり、落雁をおくりて謝す。

樓二間 紫微樓扁額 魚澄老人敬義書 千薫堂、椽三尺幅、欄干、屋根裏杉丸太 松皮付 杉皮ひき 紫竹交り、闌干に杉柱之処 四ツ谷丸太みかき上下斎 樓上天井ぶちつが杉正目 上の間十疊 床違棚 次の間九尺に三間半 上り口二つ程皆つが 下座敷上ノ間天井黒へふちつが椽類樓と同、次の間茶室あり、戸棚文晁画 天井又同じ、戸棚銅青金張付 壁すなご金屏風あり、其次の表坐敷 入頬あり、花瓶華物長壺尺余 磁器至而染付よし、花いけたる 図扁畠白地紺焼付可見 十疊余戸棚柳燕伊川椽(右辺に「エン」)竹板廻り南北 此余小室二所 踏石鞍馬見かけ壺間半計 リイシリ石二枚池のふちにあり、又橋とする物四枚 池橋三所 弁天社 稻荷社あり、臨池亭四疊半 かや屋 四角井 養拙園と額あり、石灯籠四つ 山後に二つ 池中三つ合七つ 五重塔二 藤架あり、庭中一座の圓石丸シ薄紅と青と交りたる大キサ三尺程、石面滑にして恰も彫琢を加へしがごとし 不知何名 其余尚多 是所記大概のミ、 榎原氏誘 不往、

(以下は市史稿に補記)

按スルニ秋山内記ハ、柳營補任左ノ如ク有レハ、是頃已ニ歿シテ其子ノ代ナリシナラム歟。

奥御右筆組頭 四百俵高。ノ御役料二百俵

文化四年十月十二日奥御右筆より同格。

同十四年丑二月十一日出精相勤候二付三百 秋山奎之丞 惟祺

⑬ 林氏別庄(文政七年) 金令氏遺稿

廿日 例の林氏別墅に至る、雁金やに少しく話せし故、行  
事おそし、長日を持って大に遅刻せり、錦谷(〓浅野錦谷) 鈴分 崑岡  
野村通辞昌平二在ル平野繁十郎憑資字子純、号蕙  
園、杉島氏」 「来り在、穆亭予と同く門二入、押山鰲溪  
勝田半斎 檜原景山跡より来れり、豪の韻を得て苦吟  
久しくして成、檜原氏と例の廿五景を追遙す、燕子華(〓カキツバタ)  
杜鵑花(〓サツキ) 其余夏花可觀緑陰蔭鬱たる事を初てミル、  
蕙園(〓平野)に燕子花の事を問ふ、華人は紫燕といふと云、景山  
蜻蛉の脱殻のいまた羽翼未健を捉捕しいふ、此者水  
中のウチ(右辺に「蛙」)の化せる也、我門前の小溝より半ハ脱せるを小児  
輩摸捉すといふ、五雜俎所謂点水して子を残す可徴  
と答、錦谷已二書を以て麦飯を供する由を告られたり、  
いつも六七人二過ぎるに、本日ハ已拾余人二及ふ、且幽谷(〓鈴木幽谷)上野  
御成より早く来り崑岡また早天に来れる故に人々皆  
飢、食する已二倍常、一器の麦飯已二尽たり、豚児も行ん  
と命せしか天気陰雲故二不行、若此輩行会せハ二桃三士  
を殺すの勢あらん、可笑、錦谷早く帰りさる、諸子引続て  
帰る、平野氏謙遜甚し、錦谷と話す一言一句毎二手  
を席につく、言語甚低し、加之方言国語多き故、聞取悪キ  
事あり、予崎陽の人にあふ数人 いまた」 「か如き言語分  
明なるを不聞、元来言舌静かなるか故ならん、馬場氏江戸二  
ある久し、一の遊治人也しか 言語ハ艱澁也し、

⑭ 又

八月廿三日 浅野錦谷より人をして云 廿五日 谷中林氏別庄二  
可遊 野村博士已に祭酒に計れりと、依て穆亭と同く行、穆  
亭か妻の弟」 「莊を窺見ん事を請ふ 故二同く携ふ、雁  
金屋二息ふ、史觴をミル、此書ハ昔年昌平二ありし時写せしか  
纔三分か一にして転官せし故、事を終らす、楓山二も此書あ  
れとも、外の書を写せし故卒業せさりし也、此頃勝田半斎二  
托して窃に昌平の書を借らん事をはかりしか共、近来書の出  
入甚厳にして事難成、空く其事罷ミしか 不慮にミル

事を得たり、尾藤約山（＝尾藤二洲）の書にて静寄軒の印あり、此余

中神氏蔵する覆宋本通鑑七十卷巻拾冊あり、今皆

書估の物となる可歎、莊に至れハ錦谷 篁園 崑岡来り

在、篁園令子弟子の医某と山本氏と来り管茶、是

よりさきに見たりし堂ミな出来て、経営ミな帯皮成故に

鴨居 敷居 唐紙のふち戸のふち等木の円形ニ随て削

成す、尋常造作と同じからざる可知、所觀尽くしかり、

不可枚挙、捫天巢ハ傾覆の憂を恐れしか、三分か一に

縮せり、新に林和靖の祠を造ル、其同姓たるか故なるべし

池中新に島をも作れり、橋をもわたせり、向ニ見しと趣を異

にす、捫天巢の南方に石棋あり、兩人可踞所と碁奩をお

くへき所を生木を斬て設たり、北方新ニ得たる処に行に

秋草覆人井あり、其傍石磨を以て磴とす、石あるハ此

処計也、藤架あり 棚ニあらず、豎に屏の如くにたつ、其余園

事ニ異人の設多し、終日見て不厭、勝田半斎 高関愛

吾来ル、人々行厨を携来りしに、錦谷麦の引割を齎し来

りて衆人ニ呈せらる、野郊の趣に擬せらる可悦、愛吾久し

ふりて相会せり、と昔日の事を談す、莊の約に云、詩人ハ必徒ニ

看過すへからず、一首を可停とあり、不得止詩を吟す、諸士

ミな苦吟移時、予頃来老態詩句苦澁懷中錦筆ミな

奪ひさらる、一語を得ず、強て諷詠す、病中呻吟ニ似たり、

不可看 擲棄すべし、椶篔数箇を得て帰る、薄暮莊

を出、半斎来 路に谷中瑞林寺を過く、墓を発きて金

を掘とて寺社の役人立合 見物夥しとて、其ほる人ハ

例の海浦氏也、予二十年前乙丑の歳（＝文化二年） 樗園（＝杉本樗園 幕府医官）

国手の語りし

事を想出して諸子に旧事をとく、尔時墓を発かん事を

寺社奉行ニ願ひし事不成、其後時々願出し事不成し

を 今年所々の小吏ニ経営して漸く事なるに至る、海浦ハ

生麦の産故 御勘定奉行支配也、取次て願し人ハ町人故

町奉行支配也、故に京尹度支祠部より小吏来て相「」

して掘事ニ丈余 壺二枚を得たれとも 一ハ土葬の骨、一

ハ火化の骨也、数日掘て一金を得ず、空く止と後に聞く、

後／略

十月廿二日 君玉(＝野村篁園)御催祭酒別業二行、早天より行 白山権現  
祠前二君玉二逢、同しく行、錦谷来り在、唐人の例ニ倣て

一字を以て詩を作る事二定む、錦谷聯額ニ書する泉

の字を以て命す、友野 半斎 幽谷段々来ル、約せし故、西村

俊三郎来ル 此頃来りし長崎ノの役人也 昌平ニ在 錦谷例の麦飯を供せらる、諸

子ミな少しの糧を裹て行、君玉果物と ウスノ皮 汁を供せらる、

午飯大ニ貪て飽満す、諸君所作の詩を出し西村を

して華音を以て吟せしむ、西村種々の話をとく、珍奇

可喜、唐人館内へ行者四人程あり、一役ノ一役 其徒華人より

所得五六十金といふ事二定りあるに 内々に所得八四五千

金ニ及ぶ、其役二行人四五年前より頭なる者に賄して

或三四十或六六十金を出して其役二行、砂糖を得る

事尅万余斤にも及へし、尅間四方の箱高サも同じきに

一杯の砂糖を得、其底に薬品の尊きもの、又ハ段■を入れて

上に砂糖を足にて踏付る、四方に径式寸計の竹の筒有

て節を抜て塞(右傍に「ソコ」に徹す、細き竹を以て中を突改る、其

改る人も亦賄賂を得て利を貪る、此事ニて余事推て

知るへし、昔年西国ニ黄金(右傍に「文金」)多く行きしといふ人ありて華

人に命して持返へしと有しかハ、式三万両を持来り交易の

品を下さる、金ハ五拾匁の積りニ価す、彼人ハ此交易の

品を得る時ハ持歸りて百四五十匁ニも売払ふ故ニ大ニ悦

ひて追々金を持来れり、其終りや賈物を以てすれとも 金

の位ハ文金よりハ上なり、故に賈なるを知りつゝ請取る 天

蚕(天蚕の右傍に「テグス」)ハ最上の物価僅ニ二三匁ニ不過、江戸の価と大ニ

異なり、訳人百四五十人あり、四声を知る人ハ纔廿余ニ

不過、

俊三郎言語甚明敏也、甚舒々として分ちやすし、凡

我崎陽の人に偶(遇か)する事数人 清川多平次、馬場左十郎

西尾忠次郎 猪俣源三郎等数人ニして 忠次郎言語ハ

やき故ニ分ちかたくして幾度か聞返す、我輩の詞も

又かれニ分ち難き事ありて彼もまた問返す 西肥の人

穀堂 洪氏 伺菴等又互ニ分ちかたし、就中伺庵其

甚敷人江戸に在事三十余年にして曾て江戸の声音

なし、ミな早きニ失する也、徐々と云人ハ別ち易きを覺ふ

⑩ 祭酒日暮里別業 夢蕉十一乙酉(文政八年)六月

廿五日 鈴分 山内朝早く来 野村篁園と約して日暮里祭酒の莊へ遊ぶの約あり、足下も亦其招中ニありと誘ふ、速に装して出 赤城を経 スハマを買ふて飢に充つ 切支丹坂白山を過 団子坂に行て行て(衍字か)牛(午か)飯を小川屋なるものニ命す、兼而鈴分君の同僚何某か同じ坂下の組屋敷ニ住る、朝早く先客をなす故に、主人の少年老女皆陪して能遇す、汁一種を命して林氏の莊に至らしむ 鈴山二子白山の餅や二少しの果を買て行、莊にいたれハ、趣少く変せり、野村君玉 友野 崑岡早く至りあり、浅野内記氏(ハ浅野長泰 錦谷 梅堂父)僕徒を多く連て来り在、

二十年

前行て遇しを語す、君玉果を携て行り、君玉の家士幾 三郎門弟中村「」 文蔵ノの字 来りて厨下を助く、座に入て見るに、西面に一の屋を新に作る、皆帯皮樹を以て作る、床ハいまた不成、材なき故に奇材を得るを待といふ、尽く丸木を用ゆる故に工費知へし、故ニ所々奇癖の所多く却而西行庵の趣に似たる所多し、

頗る俗趣を覚ふ、小門あり一の木ハ生木の槐なり、門の屋根ハ箱にて芝を種ゆ、下陣の様なる所に至る、また尽く丸木也、壁の丸キ所に棕の曲れるを用、壁亦円也、其余数るニ不暇、天井のふち棕の長きを以てす、池に臨て椽を作る、踏段の石を可用所、皆大木の切口を以てす 西に歩いて兼て聞し 捫天巢を見る、がけの上に杭を打 四間余の杉を三株樹の 極せる所にかけて竹簀の子を作り欄あり 先ハ窄くて杭の所ハ広し、天地二丈計、山内恐れて歩する事不能 蚊多して不可座、浅野氏ハ豪梁(ハ豪横強暴)の子弟また嶮を踏事不能、況竹簀少く朽て、且杉木揺撼す、材長きかゆるニ撓て動く也、東方の田樹間より見ゆ 一望可尽、■を下す樹間を歩す、一の八橋をわたり蓮池を経て南方の明地ニ至る、一の四阿あり 是また生樹の楓に木を架したるあり、尽く丸木を用凡を用ゆる所なり、園中搔癢樹 予昔遊ひし時の三両株ありしハ尽く花を開く 紫色可愛、新たに移したるハ花甚々少し、根株不固故か 園の西北に新に地を買添てふき井戸あり、棕を種る事三四十 先の天井疑らくハ此中より材を取しか、直にして長サ式丈余なるあり、小なるも

あり、三五百歩もあらん、韻を分て詩を作る、篁園例の方  
正の人故に、終日袴を着し正襟危座す、鈴分 崑岡また  
同性なる故終日笑談すれとも、不敢戯劇、恰も朝典に  
坐するか如し、宿約とて玄関に掲げし書数条あり、遊  
人詩をつくらざるをえず、其余数条、狂哥俳諧ハ禁して  
作らしめず、煙火戯もまた禁す、況弦哥の事をや、終日  
遊て日くれ帰り去ル、中村児と野村蟻蛤処之を擷擋少し  
跡より出つ、園丁にも謝して還る、門外戸繁に亦馬を可立  
処あり、ミな新に椴の木を植て其用とす、園中すへて  
石をおかす、唯門前の橋計石を用、予か旧遊ハ既二十年ニ  
垂んとす、園中新移樹ミな拱せり、勝田半斎跡より来る、又三郎  
か説し狐の犬を魅せし事をとく、奇也、此頃行ハる、藤八五文（||葉売り）ハ  
駒込より出る故 朝十余人の出るにあふ

⑰ 染井藤堂侯の別業 同上十一月

五日 昨夜鈴分云、明日染井津侯藤ノ堂の別業に至るの約あり、  
可行と誘る 不堪喜 早天起て行厨を携へ友野氏ニ  
会す、五つに揃ふしとの約故也、鈴分例ニかへりて不来 ■  
の前に山内慎ニあふ、弁当の物を買に出たる也、早く可来と促  
す、野村氏 山内氏 鈴分已に來れり、勝田氏未來、書をのこして  
可出とて出れハ門外に勝田氏来る 共に歩いて小日向礫川  
鷹匠町 氷川社を経て巢鴨に出、野村 勝田氏ミな此辺  
の出生故地理甚熟す、巢鴨の通りを過しか誤て行  
過て土人に問ふ 一小徑巢鴨に出るの道 兼て通りし道ノ植木や菊をミる所を過て、  
漸侯莊に至れり、一芸樹家に錦谷浅野氏駕を停めて  
待り、相携へて出莊に入 藩士板垣彦左衛門 幽谷か知る人也、  
其家ニ入て主人に初見、終ニ庭中に歩す、藩士……  
道引す、二人ミな質朴人鄭重殷勤（||慇懃） 此莊昔年井上氏 中  
村氏 鈴分氏と來れり、廿余年前莊中の事過半遺忘、只  
大盃と銅塀石像の老媪のミを記せり、今日所見筆記  
して帰る 天文十二年の石 仙人の撞木に頤を支たる像  
蝦夷大黒獅子 劔の石香爐 石不動 石役小角 石文殊  
獅子ニ乗たる石塔二つ 一つハ壺ニ級 一つハ十三級台あり  
長命寺といふ寺の跡也とて丈余の石地藏ニ 土碑一  
石灯台鬼ニ 一つハ灯台なし、くりから龍石二つ 龍ミな真向

帽子冠たる石老嫗 例の大盤銅を以て作る 大サ七抱相伝  
ふ賀侯に「」を豪奪せらる其謝として此者を贈る

銅屏丸シ厚五寸程 裏ニ鍔抱(炮か)の痕あり、李如松(明の武將 朝鮮の役)か陣より  
打し弾也、コモガイの戦に得たると云 華人の所作なるへし、

韓人の手ニ成へからすと諸子云、人の樹下に坐せる画高彫也、

左右ニ階あり階上鶴あり 下頭(間に返り点あり) 首下蓮房ノ階に 菊花を彫すニ  
輪郭ニ蓮花蓮弁あり【図】如此銅色七宝青緑也 高サ

五尺余 何の用たるを不知 庭上に要せるものならん、其北方  
所謂うはか茶屋也、此ニ入て休む、西南に面して甚ク煖銅の灶

あり 祐乗の堀(彫か)し波紋有 雪舟の下絵也とも云、外に火打  
箱様の物あり 今已に倉中にあり 此傍に木像の老嫗孫

二人と坐せし故うバが茶屋といふ、当主命して伊勢に送る 名  
のミ存せり、大切なる物故に陸を齋行と云、後園中ニ歩

す 弁天八幡等の社あり、吾輩座せる東面の座ハ東

叡王(寛永寺の親王殿下)来るにある時に此に在しむる故 津侯来る時も其席ニ  
不坐、外に席を持来り座すといふ、故ニ閉て不開 園中

大藤あり、三条長サ壺丈余直立して始て傍樹奇品

といふへし、何を以て如此を不知、ふときハ人の股にひとし、

躑躅花計の所あり、老嫗店の東南にハ楓樹数十株

あり、春秋の景可想、園広■八町といふ、惣計坪数廿三

万四百坪 薬園壺万坪ありと云 板垣氏云 春暖長日杜

鵲花(サツキ)の時ニ必来賀(来駕か)を待へしと云、不堪喜 相約して帰ル、

⑱ 又(島原侯箕田別業) 夢蕉 丙戌(文政九年)三月の条

八日兼而鈴幽谷か請ふて箕田島原侯の荘を見んと云

小太郎に托して其事を謀らしむ、其藩に小太郎門人

あれハ本日(約したりとて)被誘、幽谷と同く友野を誘

ひ復原楼(古賀精里の邸)に往て会す、小太郎後して来る、今朝主人試

業有し故におそからんと思ひし故に後れたりといふ、同く出て

赤坂を過 宮様御門下より渋谷に至る 老翁茶や二至て

刻限を聞ハ九つに近しと云、左転して上水に随ひ行事

十町計、此上水ハ荻久保より出る水、正齋か荘にかゝれる

水也、一荘に至り農民に問ハ乃是也といふ、又行事三四丁

にして一の市塵に出つ、其町名を問ハ永峯丁といふ、莊

門爰にあり、能認むれハ、先に観巢と驪山(目黒)に行道也、

北に行ハ白銀に至る、門に送迎の人ありて導く、莊に入ハ  
一の亭あり、川北喜右衛門（川北温山）佐久間文次 皆復原楼山王園  
城院ニ会せし人也、旧闕を説り、座する少頃にして錦谷  
浅野氏来ル、早朝人して復原楼に問しに主人未帰を聞、  
故に緩歩して来る、故に後れたりと説、莊の在所を旧名千  
代崎と云、新田義興の妾千代といへるか水に投せし池有、  
傍に絹掛松といふ古松あり、池心に木標あり、南北村  
を分つ事を記せり、大古標なるへし、亭西に面せし故芙蓉  
望むへし、今朝宮正御門前ニて白雪皚々たるを見る、  
此ニ至れハ雲遮て不可見、川北 佐久間の二子甚恨む、  
園中十景追加と人見友元が書せる木額あり

窮目楼 洗詩亭 踏雲橋 掬清壺 小崔嵬  
大古標 微霰岩 大畜嶼 小畜嶼 □華沼

\*□は原文ママ

龍山宣徳書と記す、八分にて胡粉を入彫たり、二  
子か道にて園中を歩す、瀑泉有しか萩久保て堤を  
修せる故に水来らす遺恨也といふ、園凡三万坪ニ近し  
といふ、竹木陰瀾巨石数百枚あり、山茶 辛夷 残梅 草  
瓣桜 桃李色を争ふ、逍遙して元の亭に帰る、各  
腹枵たり、小太郎か設し行厨ハ箕田にあり 早く可行  
とて莊を出 二子を先達而行、行程三十町程にも及ハん  
錦谷紈袴（貴族の子弟）の性 且痔を病故に杖を用ゆ、歩甚寛  
箕田ニ至れハ九つ半すき八つに近し、旧遊を想像す 文ノ化  
乙亥四月ノ十三日 精翁に陪して来る 尔時風を病咳漱せしか  
亦今日も又然り、侗庵か策にて韻ハ分て共、詩は  
重て可作と議す、園中遊翫可楽、是に公子二人あり、  
射圃に学ふを見送籌声を聞く、藤架あり芝原ニ  
一径ありて小シ小高き所より海上、眼下にあり、千帆の  
影海中に揺曳す、雲芙蓉を遮りしかとも薄暮  
少く仏頂を現せり、可悦、川北氏説て曰、園中に稻荷の  
社あり、此頃門前の酒屋の主人事ありて外に出つ、稻荷  
の額付て曰 無恙帰上ハ油上甘を呈すへしと云て  
出、無事家に帰る 経日其婦に狐憑依して乱言胡語  
す 約を負せしを責、吾都下に配すへき物なしと云 主人  
油上を如約供す、何くよといへハ島原の狐也と云、京の  
島原ならんと云しに壱人漸心付て此莊の主人采地

島原なるを知れり 尔後屢来りより吾名を一乗大明  
神と云、吾文明中に生年三百有餘 殆と白狐とならんとす、  
尚三四枚を余せり、若法華一部を讀へ、尽く化し尽さん  
といふ、主人曰 しハハ来り憑ル甚タ」「れり、願へくハ来る事を  
留られと云、狐曰所謂中れり、重ねて不来証を示さんと  
忽ちに御幣を切りて間狭む曰、吾凡狐とおなしからず、  
野狐杯来るとも此幣に手を下す事不能、若他日此  
幣動かハ我来ると知るへしと云てさる、それより前街の  
人此社に来る甚し、依て十五日を極めて人を裏門より  
入らしむと云、其社に行てミるに、実に絵馬多く懸たり、正面  
の額梨子地に金の縁とり 金の字入たる驚目小太郎詩  
二首崑崗一首詩成れり、外人ミな掣白して退く、篁園  
氏魚籃に姻家有故に早く帰り去、酒少く設く、二子ハミな  
高陽也、相傾く、侗庵少く飲とも不及、其餘皆悪客故、二  
子飲を尽す事不能、昨夜暴雨故に朝来泥濘ならん  
を恐れ木履を着し杖を携ふ、渋谷に至て始て雪駄  
を着するを得たり、幽谷の僕をして木履を持せしむ、

①藤君辛卯(天保二年)漫筆 九月条 島原侯別庄

九月廿三日 侗庵か催二而 目黒爺茶や東方の嶋原侯  
別庄二遊ふ、此遊已三度め也、前日侗庵より其事告  
来ル、早天松陰 桜墩と約して通鑑を会讀故二其  
事終りて可行と野村篁園二書を以て告置、庄二至  
るにハ大手前より南方白金へ出て長浜二至れハ稍近し、  
予街名を忘る、故二路を迂にして目黒に行、老爺茶  
屋二行荘を問て漸くに至る、侗庵 篁園 石川 秋帆  
土屋「 」「等来り有、藩の」「氏」「氏皆兼而知る所也、  
会津藩牧原只次郎 儒者 是も来ル、跡より翠岩 設楽  
氏謹児も来ル 例の亭に至る 扁額  
千代埼追加十境 窮目楼 小崔嵬 洗詩亭  
踏雲橋 玉簪沼 微霰岩 太古標 大畜嶼  
小畜嶼 庚申春日 鶴山宜卿  
侗庵 石川謹児等池二釣して興甚、小鱗数尾を得て  
大に悦ふ、池ハ新田義興の妾千代といへるか義興死せ  
しを以て不堪悲、此水中二投して死せり、節操可感

歎、衣を懸たる松ありしか今ハなし、昔年枯槁す、今僅ニ一株ありて古を慕ふニたる、莊亭西面して富士直

西にあり、一目可觀、先遊已に再度なれとも陰雲見る事を不得遺恨なりしか、本日晩天甚晴て、暮日其山の右辺ニ

落、山色如画、一点の□(石偏に章)目の物なし、興趣不可言、加之池之瀑布初遊已ニ水枯て簾を不見、再遊纔ニ飛流

ありしか纔に其勢を見るにたれり、本日瀑声如吼、水勢猛迅、泉簾妙致不可言、今日此ニ奇を兼并て我有となす、真ニ不可得の佳境四美兼たりといふへし、莊中逍遙

数度巨竹数章勢天をつく、楓葉纔染、且天氣晴朗大ニ前遊の恨を償にたる、薄暮庄を出て白金

より赤坂を過、番町ニいたり飯田町より牛門を出て手を分つ、石川 翠岩 土屋氏等早く散す、篁園例の親券(眷か)の家を

「」に訪ふ故に、是も早く辞し去、詩二首を止めらる、我輩不成掣白して退く、侗庵書生四五人陪せり、牧原

氏「」氏酒人也、頻ニ傾く、書生中一二輩酒人ありて相對して酌り、石川氏 設楽氏厨伝を侗庵ニ送らる

「」亦些の佳肴を設く、牧原氏ハ「」二子と同く残りて諸具を摒擋して(「片づける)去へしと辞せり、家に帰る時

ハ四つに過く、少し其趣を謝せんかために蕪詞を呈せり、

⑳ 極楽水播磨侯邸 癸巳(天保四年) 漫抄 白藤君

四月七日 岡野君より極楽水播磨侯(「常陸国府中藩主松平頼説)邸の藤花をみる可陪と書を以て被告、午後に行て誘ふ、中山氏來在、同く出て堤氏を誘同く出、雨瀟々八つ過邸に至る、

西方に通用門あり、藩士立花忠左衛門、岡野 堤氏ハ知己也、邸広シ式万坪ありと云、其家を出園庭に至る、藤花

稍残す、式架長式丁程株三あり、池の東面より北面に蔓を牽り、房長サ三四尺の物あり、源語(伊勢物語の誤か)に所謂藤のし

ないの三尺余りと云に遙に勝れり、池の広ハ千畝も有へし、赤鯉大サ式尺余人声を聞て來り游泳す、食を求る

なるへし、東面北面燕子花甚盛也、白きを交ゆ、高き所ニ宇賀祠あり、其下少シ高き所より水湧出つ、是水源也、

所謂極楽水、又古き所にハ吉水とも書す、極楽といふ名を忌て、今ハ其名を邸下の一寺又ハ一村中に護れり、

可笑、小亭の扁に吉水亭と云あり、陶器にて黒く一尺長サ一尺七八寸の幅に作り、ふちを高く上ケ中に白く二三分の高サにおき上て吉水亭の三字あり、張即之の字を臨写せし也、石橋あり、根ふか石四五尺四方なると三四尺四方なるをならべて可歩様二なす、石燈籠三所、古へ水を畜し、水室石を以て作れり、四五尺四方社の如し、天満宮八幡宮合祭の祠有、其余弁才天の祠、侯の令郎某の落款あり、一小亭高ミにもあり、小径を経て処々遊囑し帰る、一小樹八重の藤花あり、ミな花を折て去、初相原某の家に長刀を置、小刀のミにて行、帰る時又其家に行長刀を得て帰る、是園を管する人也、立花氏に行に、主人ハ藩中書記の官にて記録類を多く見る、葵の御紋の考を作れり、善竹(ハ竹尾善筑・天保十年没)に比すれハ甚精しと堤氏説く、菽(ハ蕎麦)を供せらる、此辺の名品也、昔年久保氏の菩提所善仁寺ハ邸の南方也、その寺にて久保氏代々の碑碣を閲せし時に供せられし物と同一物也、堤氏此ころ酒を断せりと聞て、主人盃酌を不用、故ニ甚不樂の意有、実ハ在家時而已断酒にして在外てハ不禁也、岡野氏僕ニ命して近村ニ酒を沽しむ、況や中山氏亦大高陽家故酒の来るを甚希望して数盃に及ふ、堤氏菽を食する僅に一忒椀、中山氏五六椀、岡野氏も亦同し、皆酒徒故なり、予のミ、飲陽害焉菽を食する殆と甘椀に及ん、雨瀟々不止、傘木履をかりて帰る、家に至れハ燈を点す、

⑳麻布長者丸久保帯刀園 金令子隨筆甲午(天保五年)下

三月十三日観花ト見出しあり

瀨名君書を寄て曰、さきに本月十四日麻布長者丸丹羽莊対門久保帯刀の園の桜花を賞せんと約せしか、花候已に至れり、来十三日に可行と也、依て早午して瀨名氏ニ行誘、同伴して小林哥城(おぼやし 一八六二年八五歳で没)君を其家に行誘て、赤坂を出た辺の攤書舗ニ入て二君その書を得、就中瀨名氏の得たる古稗史甚奇、年曆無と雖、元禄頃の書也、可羨、直ニ宮様御門前を過て、久保氏の家ニ至る、主人ハ富士見御宝蔵番にして面稍熟せり、共に旧を説、瀨名氏客冬

某を价して主人の花一株を得たり、所謂御衣黄(ギョイコウ 桜の品種)とて浅黄  
桜花弁の中に萌黄の筋二条あり、御衣の彩と同じ

きと云、春に至て花を開きしをミレハ至て小弁にして

紅也、花葩三十片もあらん、殆ど冬菊に類せり 紫荊(ハナズオウ)

にも似たり、大二怪しむ、終一二弁を携来て主人ニ示して

其故を問ふ、主人花をミテ大二驚告て曰、是大二錯てり、

去年根を分つ時某の諸侯へ五六株を贈りし時 同く分

ちける時誤れるならん、是ハ素普賢像(ハ白普賢像)とて御衣黄よりは

品第遙に上なる物也、幸に君に護られしハ吾欺かざるを

表するに足れり、か諸侯ハ定而望を失ふへしと笑ふ 御衣

黄ハ是也とて自ら行て示す、実に花容前に記するかことし

真普賢像ハ是也とて此花をも示す、園中百三十六品

あり、数年心を用て異品を尋ぬ、春來諸司を尋て

主人に懇請し翌年枝を乞受て接樹し如此の林となす、

就中貴价公子の秘蔵をハ百計して枝を請ふ、其苦心幾

許といふを不知、或ハ遠村に行て樹下に臥して其花を

能認む、金橋に行て野宿せし事あり杯縷々かたたる 自

ら思らく 花に顛して一生を送る愚なるに近しと、園凡千

三四坪 人の来り尋るを悦ふ、我輩座に上りて話する

時も人の来る如織、下駄杖を禁す、下駄を着せる人あれ

ハ草履を出し借す、哥城君に短冊三片 予に外片を出し

詩哥を請ふ 卒然命に応し難し 持帰りて贈るへしと

約す、旧友安富軍八子の同僚也、安富氏ニ学んて桜花

を品せしか遂に出藍の名あり、桜譜ありしか昔年の

祝融に「」の家に借して失へり、本年大岡雲峰三四十品

を写真して帰れり 追付贈られへしと悦ふ、近來年々

花時來客に障られて奇花を得る事不能 遺恨也と

樹下榜を立 諸人をして花の名を記せし 書家輩の

書せる有、俳優尾上梅幸花木を好む故來り見し事

あり、依て玉藻前といふ榜を書せしむ、彼か鋸巷に「」

せし時の名題狂言の名によれり、足立左内か魯斯亞文字にて

書せる甚奇、其余フモト■松葉蘭チヤホヒバ等小鉢數

十架を設て庭中に列す、座す事久して去、予風氣

臥蓐四五日 今日花のためにつとめて出 鼻涕不止熱猶

あり、少く風をにくむ 午後南風撲面、善国寺谷を下る

時甚可厭を覺ふ、麴町に至れハ風始て止可喜、然は

疲労恰も数里の路を經たるかことし、主人を辞して  
渋谷金王桜にいたる、園中数株の花あり、主人の庭に  
比すれば十分か一にも不至、兼て八水野侯(忠成 天保五年二月二十八日没)の莊を訪んと  
約せしか 先月(二月)十三日老侯物故、莊ハ老侯のために設  
し所故 老侯死して後ハ定而何人の手に落るを不知  
歸路青山六道辻を過、夕飯すへき所なし、四ツ谷より麴  
町二出 北辺の麵屋に入て麴を食せり、瀬名氏我家  
に可來とて同く行て話す 日已に暮たり 坐談良久して  
四つを過九つ時に家に帰る 月色如画

年未詳

②② 水野羽州 中山備州邸 我衣十八

五月廿一日 雨耕子 雨麦子 文思子ニ誘われて高田  
なる植木や仁右衛門江行ぬ 当時江都第(第一?)之植  
木屋殊ニ「上様御意ニ入之仁右衛門此度  
日光御社参御供ニさへ被召連候程之者也 奇木  
珍草目を驚かしぬ 雨麦子の娘ハ仁右衛門  
か嫁也 近年ハ植木より鉢之価至て高直  
なり いつも染付渡り物大小いくつともなく庫  
にあり庭ニあり棚ニもあり植溜ニあり 相生  
松 両根竹 斑入之草 連理の杉 葉かわりの  
の物 円き物八角に 長きハ短く 葉を透し  
枝を撓め奇功妙作種々さまく 実に植木  
の長者と謂つへき家也けり 夫より仁右衛門  
案内にて水野出羽侯の下屋敷見物せり  
広き事言語に尽しかたし 芝山高き泉  
石の清き亭閣の物数寄 池の広大 橋の  
奇工燈籠の大小数を尽し千草万木備  
らざるなし 通りを隔て又壺つの下邸あり  
是ハ前ニも過て広大也 近来迄ハ一つの大  
竹藪ニて有りしを かく壯觀の地ニ開き給ふ  
されハ土木の功勞によりて都而此辺の者共も余  
沢を蒙るに至るとかや 高低を過て橋をよぎ  
り池を渡り岡を巡りて漸末の刻ニ至る頃 彼  
仁右衛門方より田楽団子よふの物を送りぬ 従

者小姓の圍繞ハなけれとも 此園の中ニ而  
食を喫するハ勿体なくも諸侯の心をわ  
れくか賤意ニ移して難有の限りなるべし

\*市史稿は▼以下は未掲載

とて恐れ慎ミぬ▼ 夫より中山備前侯の下  
邸江行 是ハ有りふれたるよふなれ共古松  
老杉繁茂して 灌の有さまなと又俗な  
らす 此やしきの半を松平壺岐侯の有となり  
たり 垣一重を隔たれハこへも罷れり 是ハ  
高きより低ニ行けハ 多ク田舎の趣をうつし  
て数町の田あり 時なれや早苗そよきて遅け  
れと郭公の声にくからず 田中に一つの亭あ  
り 風流のこしらへにて見るに足る 向の岡に  
一つの四阿あり 此ハ鷹の為にこしらへられたる  
処なれハ所々に山を隔て幅二間斗 長拾間  
斗の池いくつもありて向垣の外の大池より  
水を引くようにもふけられし也 冬は度々  
鷹野に参らるゝよし 入口の門に百性十右衛門  
なる物住て田甫の業をつとむ 又亭の前に  
大なる池ありて杜若一面にしけれり 赤塗  
きぼふ珠付の橋をかけたたり 折ふし五月雨  
のしきりにふりて一しほ村落の興を増す  
又仁右衛門より重詰の焼飯酒肴など送られ  
しを此亭にて開きぬ 既ニ入相ニ近づけ  
ハ惜しき詠を名残にして立出るに 雨猶  
頻りにして雨具よふの物借用して高田を  
過 姿見橋のこなたにて文思の僕所々の  
雨具を荷ひ来るに逢ぬ 爰の小茶屋ニ入て  
借用の物をかへし四人連ニ而雑談して行ぬ  
強雨風を添へて雑司ヶ谷に至る頃ハ迷惑  
ニおよぶ ぬかり道をたとるゝ黄昏の頃茅舎  
に入て平臥しけり

年未詳

②③ 島津侯園中十景和哥

垂楊岸

垂直院

影うつす水もミとりのいとたれて染る柳のきしの春風

浴鶏池

尾張大納言

すむ鶏の年をかさねて池広きミキハの水に洗ふ毛衣

歩月橋

一橋大納言

秋の夜の穴をかけたるはしのうへに影ふむ月もあゆむと

そみる

天女祠

田安中将

はかりなき宝やうかふ此としも妙なる音に浪もよせつゝ

望岳亭

一橋中将

あつまやの軒端ほとなき木の間より千さとに見ゆるふしの

白雪

聴松嶺

水戸中将

幾千とせ緑をたむいはかねにひきそえたる庭の松風

右十景島津侯園中所有也 雖然有故缺一景

之詩 今有九首而已

年未詳

②4 牛門十景

赤城山 アカノギ也 牛頭山 ギヤウガンノ寺ナリ 白馬台 メジロノナリ 仁徳廟 若宮八ノ幡ナリ

筑土丘 ツクドノナリ 望嶽埒 フシミノ馬場ナリ 青牛門 ウシヨミノミツケナリ 江戸川 モトノカ也 南天坂 カグラノザカ也 庚嶺阪 ヌウレイノザカナリ

②5 東豊山十五景 服子遷高子或ナドノ作アリ

鶉山桜花 城門緑樹 溪辺流螢 榑田落月  
平田香稻 寺前紅楓 月中望岳 江村飛雪  
長谷梵宇 赤城霞色 高田叢祠 濟松鐘磬  
田間一路 巖畔酒壚 堰口水碓

②⑥ 權樂園十五景

朝陽館	嘯月池	環翠亭	綠疇舍
梅花宇	寒蘆岸	觀流塢	錦圪橋
深竹徑	嗽玉井	彩霞原	積素台
松濤軒	群芳圃	掄村門	

②⑦ 紀州公御庭之勝景

內園

修木閣	小嵯峨	枕流床	漱玉泉
幽篁床	垂英圪	浣花溪	洗心亭
			亭前有雉石湍
			華屏

外園

含暉亭	亭上遙望／余香圃
杜若洲	積翠池
丹楓苑	古馭林
宜春觀	觀前有西行桜／西行井
古行程	掬水徑
鎮火祠	弄花苑
鎖翠溪	儲香園
松濤阜	晚紅丘
觀魚亭	

垂暉石

向陽亭

望雲亭

稻荷社

雲英沼

黃金溪

歩月叢

望嶽亭

鳳鳴閣

柴門

凌雲道

香陰亭 亭上望／小華林

二虹梁

拾蕊徑

五里香

映階碧

白紅台 台前有清音洞／

風字沼

文政丁亥(文政十年)四月十一日卿より見分の事ありて小普請方の  
役二見たりしと浅野岡右衛門より差こそす